

## この夏の旅



菊池ふじの  
関 治 子

### 第三回全国国公立幼稚園 研究協議会に出席して

私たち職員一行八人は、七月三十、三十一両日の、第三回、全国国公立幼稚園教育研究協議会への出席を機縁に、更に南紀井、白浜、勝浦の両温泉、那智の滝、プロペラ船での海峽探勝にと歩を進めたのであった。現在の職員室のメンバーでははじめての職員旅行で、それだけに期待も思い出も尽きない。ただ恨むらくは、村田教諭、先き頃から健康を害されて、この行に同行せられないことである。

この研究協議会が比叡山でもたれると聞いた二月の頃から、「こんどは、みんなで出かけましょうね」との及川先生のお言葉に、職員誰もがこの比叡山ゆきをどんなに楽しみに待ったことであつたらう。

何十年前前に読んだ「虞美人草」の、宗近さんと甲野さんとの、今では見られないような明治時代の呑気な対話で、肩をそびやかしているいやに頑固な山、と印象づけられてい

た比叡山。

天台宗の総本山として、最澄伝教大師以来一千百有余年の久しい間、法燈絶ゆることなく、また、栄西、源空、親鸞、日蓮など幾多の傑僧を輩出した我が国仏教の精華としての大臣利延曆寺。

また白河法皇をして「朕の意の如くならざるは鶴川の水と双六の采と山法師とのみ」と嘆かれた山法師の跋扈で忘れることのできない延曆寺。

いろいろに想像してはこの日のくるのを待っていたのであった。

さて一行は、自分たち主催の二つの幼稚園教育講習会を、酷暑の折柄にもかかわらず、昨年に勝る盛会裡に済ませ、二十九日に東京を立った部隊、二十八日に立ったもの、別の途から集る人など出立は一緒ではなかつたが、二十九日夕刻、比叡山の宿房第一号室に一同は会した。期せずしてみな東部坂本からケーブルカーを利用して登山したのであった。

半空に聳え立つ老杉古松、鬱蒼とした原始林、森厳にして静寂そのもののようなこの雪山。山中に点在する堂塔伽藍、下界を超越した冷気、樹間からかい間見られる琵琶の湖の

景勝。

すべては靈山の名に値した。

いまでこそケープルで八分もあれば山頂に  
来られるけれども、その、すげ笠をかぶって  
このけわしい山道を登った天正の時代に、根  
本中堂をはじめとしてこれらの素晴らしい堂  
宇を、どのようにして建立したものであった  
ろう？ これら巨大な諸々の材料を、今日の  
ような文明の利器のなかった時代に、どのよ  
うにしてこの山頂まで運んだものだろうな  
ど、思いは遠い昔に遡ったのであった。

夕刻から夜にかけて、全国からの会員は統  
々と宿舎に当てられたこの宿房に参集した。  
廊下でお会いする顔々は、みなおなじみのあ  
る親しい同志の顔ばかりであった。

夜十一時「皆さんお疲れでいらっしやいま  
した。おやすみなさい」の地元お世話係りの  
放送に、第一夜の夢をむすんだ。

明くれば三十日、研究会第一日。プログラ  
ムは次のよう。

一、日程

第一日 七月三十日

開 会 式 (一〇・〇〇～一〇・三〇)

奏 楽

開式のことば

挨拶

全国公立幼稚園長会長 小林 操

挨拶

準備委員長 柳沢 静子

祝 辞

閉式のことば

研究 発表 (一〇・三〇～一二・〇〇)

昼食・レクリエーション (一二・〇〇～一  
〇〇)

分科研究協議会 (一〇・〇〇～一二・三〇)

講 演 (二・三〇～四・〇〇)

“文芸雑感” 京都大学教授 伊吹 武彦氏

夕食・レクリエーション (四・〇〇～ )

第二日 七月三十一日

朝 天 講 話 (六・〇〇～七・〇〇)

葉上 照澄師

朝 食 (七・〇〇～九・〇〇)

研究 発表 (九・〇〇～一〇・三〇)

分科研究協議会 (一〇・三〇～一二・〇〇)

昼 食 (一二・〇〇～一・〇〇)

演 演 (一・〇〇～二・三〇)

“服飾あれこれ”

藤川女子専門学院長 藤川 延子女史

開 会 式 (二・三〇～三・〇〇)

自 由 見 学 (三・〇〇～ )

二、研究発表題目および発表者氏名

(内容は別冊研究集録による)

第一日

一、描画表現の実態と指導の反省

熊本県熊本市立熊本幼稚園教諭

石川 春代

二、幼児の創造性を培う絵画製作の指導

岡山県津山市立東幼稚園教諭

常藤 文子

三、躰についての実態調査と母親指導の事

例研究 兵庫県神戸市立楠幼稚園教諭

森 操子

四、健康の習慣を身につけさせるにはどの

ようにしたらよいか

愛知県名古屋市立第三幼稚園教諭

山本 正

第二日

一、私の園を語る

望ましい集団生活(遊び)の中でのびて

ゆく子ら

香川県観音寺市立観音寺幼稚園長

松木ゆきの

## 二、絵画製作の工技指導の研究

東京都中央区立泰明幼稚園教諭

宮崎 恵子

## 三、*「はなし」*ことばの指導について

福島県福島市立第二幼稚園教諭

長谷川 朝子

## 三、分科会による研究協議会

第一日 七月三十日

### 第一分科会 指導者

奈良女子大学教授 富永 正氏

司 会

奈良市立飛鳥幼稚園長 奥村 正司

○幼児の自主性を育てるのはどのようにしたらよいか

○幼児の仲間のくらしにおける自己中心性をどう指導したらよいか

### 第二分科会 指導者

大阪市大教授 黒丸 正四郎氏

司 会

和歌山市立岡山幼稚園長 樋口 正子

○いわゆる「問題児」の正しい観方と教

い方について

### 第三分科会 指導者

大阪学大教授 小川 正通氏

司 会

滋賀県近江八幡市立八幡幼稚園長

三長きみ江

○教育要領にせめされた「社会」「自然」の基本的な考え方について

○幼稚園教育要領から考えた望ましい單元はどのように立案したらよいか

第二日 七月三十一日

### 第一分科会 指導者

大阪芸大教授 功刀 嘉子氏

司 会

大阪府枚岡市立枚岡幼稚園長 藤井 千代

○幼児にのぞましい集団生活をさせるための指導方法はどんなにすればよいか

○社会性を育てるための保育形態について

### 第二分科会 指導者

姫路大教授 守屋 光雄氏

司 会

神戸市立稱幼稚園長 中谷 久子

○幼児の協同性を培うにはどのようにし

たらよいか

### 第三分科会 指導者

京都市児童院 島津 峯真氏

司 会

京都市立桃園幼稚園長

北尾 甚之助

○健康教育上から幼稚園での休息を如何に指導するか

○一年保育児並びに二年保育児の教育期間の違いと年齢差を考慮した指導計画とその運営上の留意点について

## 四、議 演

1、文芸雑感 京都大学教授 伊吹武彦氏

2、服飾あれこれ

藤川女子専門学院長 藤川延子女史

「いつも主催ばかりしていてゆっくりすることがないから、こんどだけは全のお客様になって、のんびりと参会しましょう」とは誰いうとなく申し合わせた一同の願いだった。

あり態に言えば、研究発表や協議会での一言一句もおざりにしないで克明に勉強してこよう、という気構えではなく、見学観光を兼

ねて、大局からこの大会の空気を吸ってこよう、みんなの中へ顔を出して懇親の意味も果してこようといった気持ちで東京を発つたのである。だから、研究発表の一幕についてや協会の諸問題に関しての記録も感想もぬきにしよう。それにゆるされた紙数にその余裕もないので。ただここに書きとめておきたいのは、この酷熱にもめげず、各研究者は、研究物や図表の数々を、この山頂まで持参せられ、日頃の研究を熱心に発表せられたこと、参会者もまたそれらを、熱心と親しみの間に聴取せられたことである。

第二日の閉会を待たないで、若い方たちは琵琶湖めぐりへと連れ立って先発され、及川先生と私は「服飾あれこれ」の御講演を割愛して、もときた道を一路京都の宿大浦旅館へと下山したのであった。宿に着いたのは日盛りの三時半。

京都は暑いところときいていたので、まして日盛りのこの時間では、さぞかし堪え難いことと覚悟してきたのに、これはまた思いのほかで、宿の窓下を小川が流れ、その川には京染の水洗いらしく、数条の反物が川底に流れていて、その上を吹いてくる風はまことに

涼味満々たるもので、意外の拾いものであった。宿の女主人また、まことに気もちのよい応接、接待で、旅中、この宿が一番居心地がよかったと述懐したほどであった。

夕刻、琵琶湖めぐりの一行と、四ツ谷幼稚園の佐久間先生、新宿幼稚園の黒田先生とを加えて、一行は十人と賑わう、よる京極、祇園などの町をさまよう。

桂離宮拝観、八月一日。午前十時、車をかけて、兼ねて許可を頂いておいた桂離宮拝観にとこの宿を後にする。

殿舎林泉の美、流石は東洋一。今をさる三百年の昔、豊臣秀吉が、正親町天皇の皇孫八条の宮のために造営したものとときく。そぞろにその当時の文化を偲んで驚歎おくところを知らず。

愛珠幼稚園見学。桂離宮の拝観を終えて直ちに大阪なるこの幼稚園を見学する。明治十二年五月、我が国第二番目の幼稚園として創設された府立模範幼稚園の遺産を同園の廃園と同時に受け継いだこの愛珠幼稚園は、一度の災害にも遭わずに今日に至り、ために、我が国の幼稚園の発達を物語る数々の史実がそのままに残っている。丁度我がお茶の水幼稚

園とは姉妹の関係にあり、年月から言えば妹で、その包蔵する史実の量からすれば関東大震災ですべてを烏有し帰した我が園と比べてはまさに、こちらが姉園の感じである。

現園長中村道子先生は、この園の歴史を自覚せられ、伝承された数々の遺産が、我が国の幼稚園史にとって、如何に貴重な史料であるかを痛感せられて、幾多の困難を排除し、これらの貴重な資料を蔵するための鉄筋の倉庫を建立された。そしてその史料の整理系統づけに日夜努力せられつつある。私共一行は先生のご熱心なる説明を伺いつつ、これらの貴重な史料の一つ一つを拝見したのであった。

ご馳走は目と耳からばかりではなく、大阪の中央部に位して居る本園はまた大阪文化の中心地でもあった。したがって、口からの粹を極めた御馳走をも満喫させていただき、御厚意を深謝して、一部は大阪城へ、一部は宿へと、ここを辞した。

大阪での一夜は流石に暑かった。気温はまさに三十六度。真夜中にも汗を拭うこと数たび。

この旅行の計画から宿の交渉、切符の買い

方一切は、主として旅行馴れたお若い富樫さんと関さんとがして下さった。この後々までもこのお二人にお世話を願うのではお申しわけない、ということ、この日あたりから、

その日一日の一切を計画し世話し始末する当番というのをきめた。若い方々はこれを「まますん」と呼んだ。当番などというきこちない名ではなくて「まますん」とはまことにやわらかな味のあるいい名前だと感心する。今日の今日まで、何から何まですべてお世話になって、人後に悠々とついていた私も、これでは相済まないことと発奮して、明日は「まますん」の役を願いで、夜のうちにバトンを受けついで。明日一日は、私が「まますん」の役。流石に緊張して、明日の行動をふとんの中で考えた。

八月二日。午前九時四十五分、紀井西線天王寺発の準急で、一路紀井路の旅へと歩を進めた。

駅ごとに山と積まれている西瓜、次々に展げてくる蜜柑畠一帯の眺望、ああ紀州みかんの本場だったなあ!! と、あの甘い味と重厚な皮の触覚がふと匂ってくる。そして南国はやっぱり天の恵みの豊かであることを、車窓

から眺められる民家のただ住い、畑のみりなどにも感じとられて、東北産の私は、いくど感慨に耽ったのであった。

白浜温泉 四時間ほど揺られて正午過ぎ白浜口駅着。直ちにバスで白浜温泉の美浜荘に着く。

ここの温泉街は、昔から、西の別府、東の熱海、と共に、大都会をかかえての観光地として有名である。太平洋の黒潮の打ちよせる白砂の長汀は、明かるく強い真夏の陽光をうけて、南国的な情趣を斉し、その美観には思わず感嘆の声を発したのであった。海水浴場としても絶好の海である。少憩の後一同で觀光バスを駆って紀井半島を一周する。

千畳敷、三段壁太平洋に突出したこの半島の海岸線は、入江や岬の出入が著るしく、正に長汀曲浦の形容そのままの風光である。いまだ台風之余波のおさまらないこの、千畳敷や三段壁の断崖絶壁に逆巻く怒濤の水煙は高く天しに沖、その壯観はたとえるにもものなく、私たちの眼底に強く残って、終生忘れることができないであろう。

平草原 ここは白浜の屋根と呼ばれ、ここからは眼下に白浜湯崎の温泉街は言うに及ば

ず、緑の松林に囲まれた水族館の赤い屋根、田辺湾を距てて牟婁の連山が展望され、自然と人工の調和された美しい眺めをほしのままにすることが出来る。

京都大学臨海実験所ここが、この白浜觀光バスの最後のコースである。硝子張りの大きな水槽の中で、海老の貝採りを眺めさせる設備はごく近頃できたらしい。

また附属の水族館には大きな海竜やその他の魚類が数多く蔵されていて、流石は南国の水族館という感じを深くさせられた。また白浜觀光の途中の道々には、「はまゆう」という夏白い花の咲く珍しい植物が至るところにあつて、いかにも南国らしい情趣を感じさせてくれたが、この実験所の構内にも至るところに見られた。この植物は採取を禁じられているとか。

水旅館に隣接した附属の植物園は、暖い気温に恵まれて、バナナ、椰子、サボテン、ゴムの木、ブーゲンビリアなどの熱帯、亜熱帯の植物が多数繁茂していて、いま身はハワイにいるかのような感じになったのであった。

二時間の觀光を終えて夕刻宿へ帰り、宿望の白浜温泉に浸る。相当強い塩分で体がベト

ペトするぐらい。夜、今日一日の会計などを清算してバトンを明日の「ままさん」の石黒さんに渡す。

八月三日、今日と明日の二日間亘る和歌山県主催の講習会の講師として、及川先生堀合、村井の三先生は、会場の白浜にこのまま居残られることになり、他の七人は朝八時宿を出で、白浜口駅から海岸線つたいに勝浦へ向かう。車窓からは太平洋の打ち寄せる海岸が見えがくれて、変化に察む眺望は飽くことを知らない。

那智の滝 列車は、今宵の宿に予定している勝浦を通り過ぎて、先ず那智駅まで進行する。ここで下車、直ちにバスで那智山へ向かう。山麓に近づくにつれて、数百年來斧鉞を入れないうっ蒼たる那智原始林が眼前に展げてくる。那智神社前で下車、神社に参拝をすませ、神社の神体なる那智の滝を探勝する。この滝は高さ百三十米、深さ十三米。日光の華巖の滝と覇を争う天下の名瀑で、華巖の滝は男性的であるとすれば、この那智の滝は女性的であるといわれている。なる程、幅広い絶壁に懸っているこの滝は、途中や下端の壁々を打って飛散し、その形状は瞬時も一定せ

ず、その飛沫は四散して夏もなお冷気が身に泌みわたる。那智四十八滝の中の随一で、普通那智の滝とはこの滝を指す。滝壺まで足を運び運、滝の水に浸って、しばらくこの滝の觀賞を恣にする。連日の日照りで、今日の水量は平時の1/5ととき。水量の豊かなときの壯観は如何ばかりかと想像してここを辞す。青岸渡寺 午後の日盛り時、石段坂を四百八十米登るときいて、佐久間、黒田の両先生と私は、下にて遙拝ときめ、茶店に休んで、若い方々の帰りを待つ。

やがてバスにて那智山を下り那智駅で勝浦に向かう列車を待つ。那智駅は、白砂青松の海岸にプラットフォームがあるといつてもよい程に海辺にあり、変化に富む海の景勝に見とれている間に汽車がつく。二つ三つ駅を大阪の方向に戻って勝浦駅着。勝浦港棧橋より旅館備えつけのランチの出迎えを受けて、勝良荘に入る。

勝浦 南に碧りの海を抱き、うしろに緑の松山を背負っているこの宿勝良荘は、一軒家の宿で、この太平洋の海を占有しているかのように。真新しい普請で更に増築しつつあり、その設備は近代的な至れり尽せりの建築

である。大阪をはじめとして、関西の大都市の觀光客を一気に呑まんとする営業の熱意が、宿中に満ち満ちていてサービスぶりは上々であった。

この外湯は、自然の大巖洞の中に湧出し、浴しながら、打ちよせる太平洋の荒浪が眺められる。内湯へも家族風呂へもと筈だったが、真夏の一泊の旅では、湯上りの熱さがいとおしく、つい、どの湯をも満喫したとは言えない。明くれば八月四日、今旅行最後の日。掉尾を飾る瀨峡探勝の日。今日の「ままさん」は一番新人守永さん。早朝から緊張の面持。「ままさん、緊張する？」ときけば言下に「ええ」とはぎれのいい返事。何くれとお世話をしていただいて朝出立する。おかかえのモーターボートは「螢の光り」を奏樂して名残りをおしんでくれる。

佐久間、黒田の両先生はプロペラ船を断念され「紀の島めぐり」を思い立たれて、午後までここにとどまられる。

瀑峡 そこで今日の探勝は一行五人となる。汽車は新宮駅で下車し、プロペラ船の乗船場なる熊野川の河原まで急ぐ。プロペラ船とはどのような船だろうかと期待して待つ間

に、定刻の十時には次々と眼前に現れてきた。

普通の屋形船のような船で、ただ船前の発動機のところにプロペラがついており、進行の爆音とともに風車のようにまわるので、この名がついているのであろう。船の中は椅子式のもの座るものなどあり、私たちの乗船のときは、第一号船のみは椅子式で、他は座り式。若い方々はこの椅子式がとれず第二号船の座り船になったのがいかにも残念らしく、後々までの語り草になっている。

さてプロペラ船は爆音とともに運行をはじめる。登り三時間半、下り二時間の行程。

連日の日照りで、ここも水量は平時の1/5とか、清く澄んだ水に川底がわかる。恐れる程の深さではなく、所によつては、手の届く浅瀬もある。顧覆しても先ず先ず命に別条はないと安心する。

船の進行につれて兩岸に迫る山また山の風光に、熊野路は山の国、木の国の感を深くする。

瀬八丁とは、いわゆる熊野川の上流、北山川の更に上流の和歌山・奈良・三重の三県境跨った田戸部部落附近二軒の溪谷をいうの

で、北山川の激流が淀んで深淵となり、屏風を突立てたような奇岩の上には、千舌斧鉞を入れない原始林がうっ蒼と茂つて、この碧潭に影を落す。訪ねて見て始めて知った瀨峡の

この静けさ、美しさ、えも言われぬ幽邃な絶勝はまことに驚嘆に値する。本旅行の掉尾を飾るこの大自然の南面は、旅の思い出として、いつまでも心の奥に残ることであらう。瀬八丁を極めると、船はまたもときた道を下る。

熊野路の風景を心ゆくまで満喫しながら四時、新宮の河原につく。直ちに連絡してあった宿へ急ぐと、ここには、紀の松島めぐりを終えられた住久間、黒田の両先生が、はやおいでになっていて、やきつくようなのかわきを訴える私たちのために、西瓜や初もの二十世紀を冷やしておいて下さった。この西瓜の味、梨の味のおいしかったこと、これもこの旅で忘れることのできないものの一つである。

この宿で、一行七人は二の膳つきの御馳走で、最後の晩さんをすませ、夜の十一時新宮発の列車で帰路につく。天王寺駅には翌早朝五時着。ここで打ち揃って朝食をとり、やがて旬日に亘る同行の友情を互に謝し、しばし

の別れを惜しんで四散したのであった。一路東京へと急ぐひと、親戚を訪ねるひと、といったぐあいに。

さて講師として白浜に止まられた及川先生堀合、村井の三先生は、丁度一日おくれて白浜を発たれ、先発隊の歩んだコースをとって南紀井の旅をつづけられ、こちらも大阪天王寺の駅で及川先生は八月十三、十四日の大阪における講習会の講師として、なおも大阪に止まられ、堀合、村井の両先生は愛児愛嬢の待ちこがれていられる東京の家へと急がれたのであった。(菊池)

昭和三十一年度

## 東日本幼稚園教育

指導講座

に参加して

昭和三十一年度東日本幼稚園教育指導者講座に参加して、昭和三十一年度東日本幼稚園教育指導者講座は、八月二十八日より三十一日までの四日間にわたり、埼玉大学教育学部を会場として開催されました。

主催は、文部省・埼玉県・埼玉県教育委員会・浦和市・浦和市教育委員会・埼玉大学・埼玉県市長会で、参加人員は二百二十七名。

参加者資格は、都道府県教育委員会または、都道府県知事の推せんする幼稚園の園長、教員、教員養成大学長の推せんする附属幼稚園長、教員という規定でした。

この講座の目的は、幼稚園教育において、当面解決を要する諸問題をとりあげて研究協議し、指導者としての基礎的教養ならびに指導能力を高め、幼稚園教育の改善充実を図るということにあります。

夏休み最後のこの四日間は、八月には珍しい雨つづきで、肌寒いまでに感じられ、連日雨具を離さず、浦和駅よりバスで会場の埼玉大学に通いました。

### 日程・講演

第一日は、開会式、日程説明があり、その後、幼稚園教育要領について、文部省初中等教育局視学官大島文義氏の講演がございました。講演内容は、幼稚園教育要領の性格、幼稚園教育課程改正の趣旨、幼稚園教育要領の構成と内容、幼稚園教育要領の使い方についてでした。

第二日の講演は、埼玉大学教授山根薫氏による、幼児のしつけ（道徳性の発達）でござ

いました。内容は保育の目標、道徳教育、家庭との協応にわたりました。

それ以外の日程は、四日間十六時間三十分にあたる班別研究にあてられました。

第一班 指導計画

第二班 健康

第三班 社会

第四班 自然

第五班 言語

各班には次のような研究主題が設定され、それについては、指導者側の周到な調査や資料と参加会員の持ち寄られた資料によって、すでに研究は歩み進められた形で、はじめたこの会に参加する者も、すぐに考えを本論にすすめて行く事が出来たのでした。

指導者側の基礎研究と万端整った御準備には頭の下る思いが致しました。

### 研究主題と協議内容

第一班 指導計画（協議内容は各班一例を挙げておきます）

年単位日単位の指導計画の適切につくり

かたは、どのようにしたらよいか。

○各幼稚園で年単位の指導計画を立案す

る場合、万事準備すべき資料

第二班 健康  
運動や遊びの指導はどのようにしたらよいか。

○健康の増進に必要な運動や遊びについて

第三班 社会

友だちと仲よしたり協力したりする財

導は、どのようにしたらよいか。

○主題に即する経験のとりあげかた。

第四班 自然

自然に対する観察態度の助長は、どのようにしたらよいか。

○幼児が最も興味をもち関心を示す観察

の材料。

第五班 言語

すすんで話をする指導は、どのようにしたらよいか。

○すすんで話をする機会とその指導。

### 指導者

第一班 埼玉大学教授 遠藤 泰助氏

同 助教 野間 郁夫氏

第二班 埼玉大学教授 野口 源三郎氏



同 助教 杉浦 正輝氏

第三班 埼玉大学教授 桑原 作次氏

同 助教 先崎 正次郎氏

第四班 埼玉大学教授 須賀 正市氏

同 助教 須甲 鉄也氏

第五班 埼玉大学助教 井上 敏夫氏

同 助教 湯永 重次氏

指導補助者は、県教育委員会の指導主事、指導委員があたられ、司会は地元幼稚園の経験深い園長先生方でした。

何れ、くわしい内容は、東日本、西日本合同の集録が印刷されるそでございます。一概に結論には到達出来るものではありませんが、一応の結論に近づくまでの過程に意義深いものを感じました。

報告された協議の結果の一例をあげますと、健康班の健康の増進に必要な運動や遊びについての考え方及び特に注意すべき諸点については、健康の概念をよく理解する必要がある、それには、W・H・Oで定義した健康念の概を理解しておくことがよい。つまり「健康は、病気または虚弱でないだけではなく、身体的にも、精神的にも、完全に良好な

状態である。」というように健康とは非常に広範囲な意味をもっている、という結論に達しました。また、健康と体育及び健康教育との関係は、体育は身体活動が手段であり、その目標の一つに健康の保持増進がある。健康教育は健康の保持増進が目標であって、その手段として身体活動がある。両者はあい重っている部分の多い教育である。このように根本的な考え方をよく整理致し、健康の増進に必要な運動や遊びにはどんなものがあるか。その利用法や、指導上の注意点など具体的な話合いが活発に展開されました。

昨年にひきつづいての主題も、かなりありまして、昨年度の結果が、集録の紙面の都合上、それ程、詳細なものが載せられず、時に重複しているように見受けられました。一つの主題が一時に解決するわけではありませんから、こうして問題を考えてみる機会を持ち、協議出来たことは尊い収穫だったと思えます。

主催・地元側の御好意により、埼玉県名物秩父おどりのデモンストレーションが行われ、本場の秩父おどりに接することが出来ました。又、会員一同に手ほどきをして頂き、

班別研究協議の疲れをいやし、各地から遠路参加された会員の気持を和やかな義気の中に入れて下さいます。得がたい埼玉みやげとさせて頂くことが出来ました。

第四日午すぎ、ようやく雲の切れ間から夏の太陽を仰ぎみられるようになった頃、会員一堂に集り、班別研究の報告と質疑応答のひと時を持ち、熱心に展開されました。この会も幕を閉じました。(関) (筆者はお茶の水大附属幼稚園教諭)

